

伊都国の玉つくり職人のムラ

潤地頭給遺跡

—福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査概要—

前原市文化財調査報告書

第89集



2005

前原市教育委員会

序

前原市は「魏志倭人伝」に登場する「伊都国」の地として知られております。現在では、政令指定都市である福岡市の西隣に位置しており、この立地条件の良きに加え、交通アクセスの改善により福岡都市圏におけるベッドタウンとして発展し続けています。

今回、概要を報告する洲地頭給遺跡の発掘調査は、市内の児童数の増加に伴って計画された前原市立東風小学校の建設に先立って行われたものです。遺跡からは、九州で初の発見となり、調査当時、新聞紙上やテレビ、ラジオなどで大きく報道された玉作工房をはじめ、弥生時代から中世に至る大規模な集落の存在が確認されており、当地が重要な拠点として栄え続けていた事実が明らかとなりました。

本書は、本報告に先立ち、コンテンツ数で2,000箱を超える膨大な出土遺物や遺構などの資料の中から特に重要なものを抽出し、まとめたものであり、本市の歴史を理解する上でお役立て頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力とご理解、ご助言を頂きました皆様へ感謝申し上げます。

平成17年3月31日

前原市教育委員会
教育長 菊竹利嗣

例言

1. 本書は平成14～15年度に福岡県前原市大字洲地頭給にて実施した洲地頭給遺跡の発掘調査概報である。
2. 本書の執筆と出土遺物の実測は前原市教育文化課の江野道和と江崎翔海が行い、編集は江野が行った。なお、II区2号木蓋土坑墓の実測は平田幸代子、石剣実測は山崎賢代子が行い、執筆分担については文末に括弧書きで記入している。
3. 現場における空中写真の撮影および各調査区の合成作業は（有）空中写真企画に委託した。
4. 福岡の製図作業は末盛呉泰美が行い、イラストについては藤野さゆりが描画および着色を行った。
5. 遺構と出土遺物の写真撮影については基本的に江野と江崎が行ったが、早期造船や鏡、勾玉等の遺物の一部については フォトハウスOKA（代表 岡紀久夫）に委託した。
6. II区1号木蓋土坑墓の実測は九州大学大学院教授の中橋幸博氏、人骨の取り上げについては福岡市埋蔵文化財調査センターの比佐陽一郎氏と片多雅樹氏にご指導頂いた。心より感謝いたします。
7. 本書の報告内容は資料の整理途中での認識であり、今後、整理が進んだ段階で修正を加えることもある。あらかじめご了承ください。



目次

巻頭カラー図版	1	6. 弥生時代の集落	25
1. はじめに	17	7. 古墳時代の集落	26
(1) 調査の契機と経過		(1) 竪穴住居	
(2) 遺跡の位置と環境		(2) 金製鍔剣変具	
2. 遺跡の概要	18	8. 弥生時代の墓	27
3. 玉作関連の遺構と遺物	19	(1) 甕棺墓	
(1) 玉作工房		(2) 鏡出土土坑	
(2) 罌外土坑		9. 古墳時代の墓	30
(3) 使用石材と工具		(1) 木蓋土坑墓	
4. 早期造船	22	(2) 人骨の取り上げ	
(1) 井戸		10. おわりに	32
(2) 早期造船部材			
5. 祭祀土坑	24		
(1) 遺構			
(2) 出土遺物			



国史跡 志登支石置群

I-W区

I-E区

V区

II区

武作土房跡

雷山川

IV区

潤地頭給遺跡

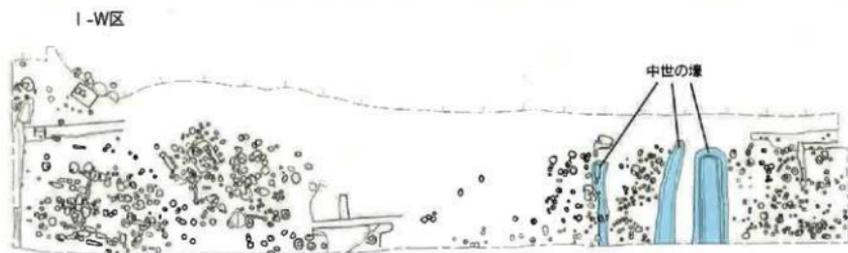
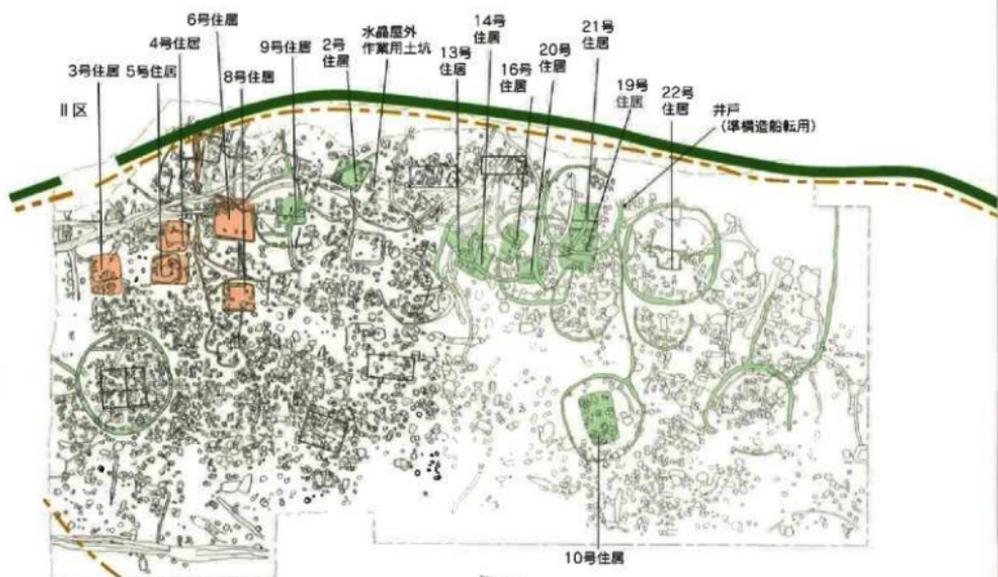
志登松本遺跡

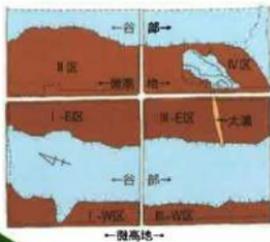
III-W区

III-E区

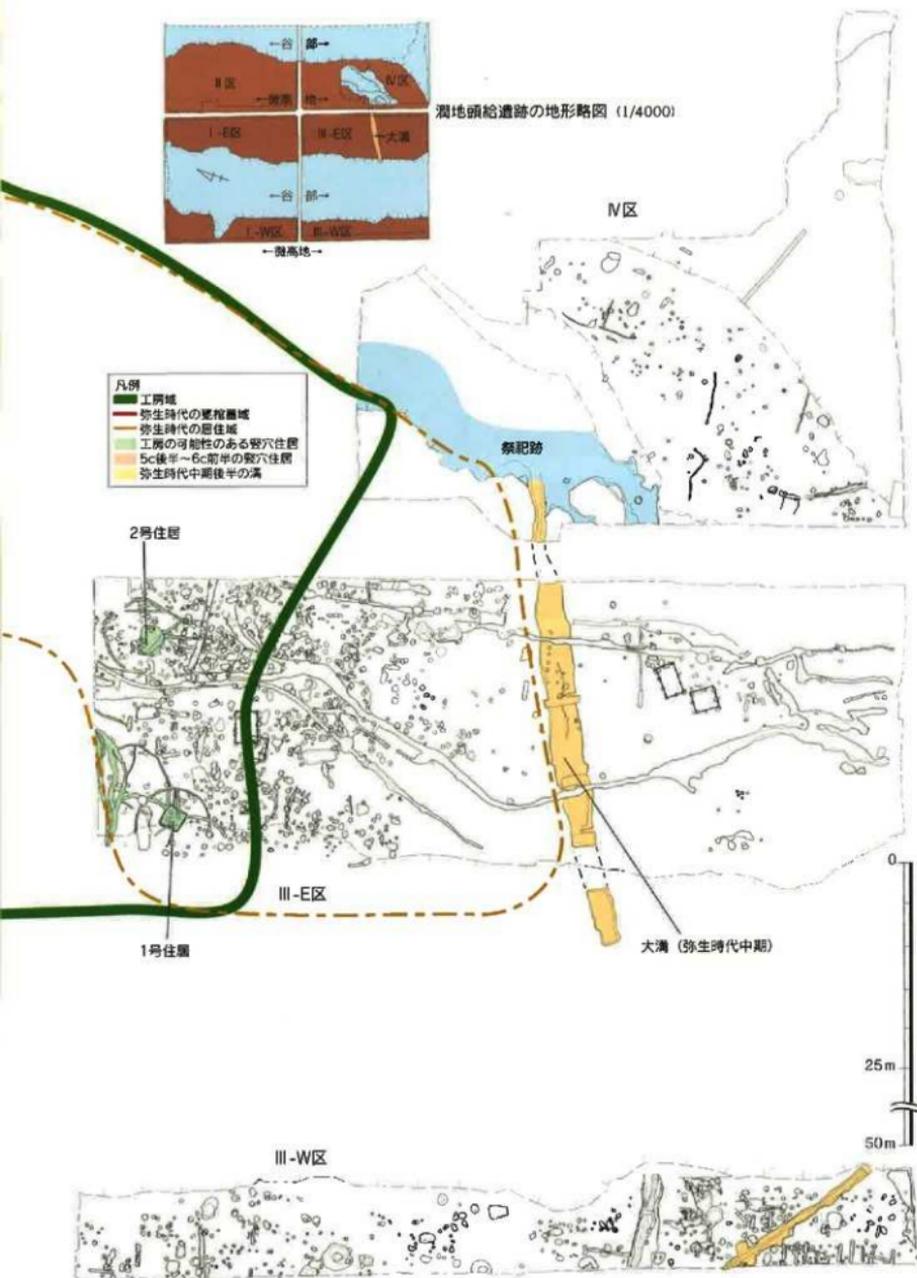
潤中町遺跡

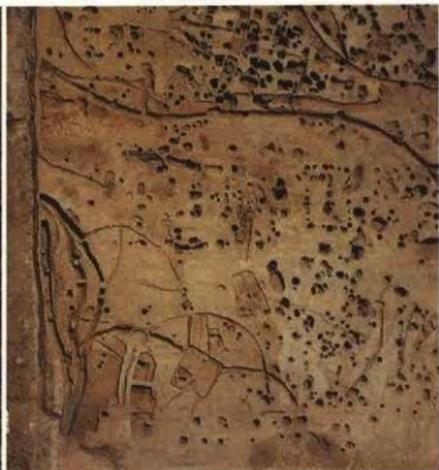
潤地頭給遺跡は写真の右側を流れる雷山川の左岸に位置する。同じく左岸の遺跡の右上の森は国史跡「志登支石置群」。かつての遺跡周辺は現在の景観と大きく異なり、松林帯が入組んだ複雑な地形であったことが調査によって明らかになった(写真18)。





潤地頭給遺跡の地形略図 (1/4000)





(最上段) II区南側の工房のようす

(左) I-E区南側の工房のようす

(右上) III-E区北側の工房のようす

それぞれ工房群の東、西、南部のようす。
工房を中心として溝を掘り、谷に向かって排水を行っているようすがよく分かる(→P.18)

(右) I-E区

1号住居のようす

住居の中からは作業台やハンマーなどの玉の製作時に使用する工具、碧玉・水晶・蛇紋岩などの未原石等が一式出土している。かつては多彩な玉を製作した工房であったと考えられる。(右が下の写真の範囲)



(下) 住居内の南西隅から出土した玉作の工具

住居の隅からハンマーとして使用した「叩き石」が2箇同時に並んで出土した。



(右) I-E区 10号住居内の作業用土坑のようす

住居の床に掘られた右下の浅い穴(土坑)の中とこの周辺から合わせて3箇の砥石が出土した。玉作の作業に使用した可能性がある。(→P.20)

(左下) I-E区 6号住居内から碧玉が出土したようす

(右下) I-E区 8号住居内から水晶製の玉の未製品(轉盤玉)が出土したようす

この住居からは水晶が数多く出土しており、水晶製の玉を専門に作る工房であったと考えられている。





(上)水晶の屋外作業用土坑のようす

透明または白色の破片が水晶で右下の2点が砥石、右端中央の1点が叩き石、玉作の作業後にいらなくなった工具や破片を埋めた穴であろう。

(←P. 20)



(右)屋内と屋外に掘られた作業用土坑のようす

左奥が水晶の屋外作業用土坑、中央の土坑は壱穴住居の床に掘られた土坑で、中から高の入った砥石や鉄製工具が数多く出土している。

(下)碧玉の屋外作業用土坑のようす

砥石の左下に散らばる深緑色の破片が、碧玉の原材料になる碧玉。





(上) 溝の中のようなす

工房の周りの溝からは土器や玉作の工具、石材が大量に出土した。溝を埋め戻す時に廃棄したものであろう。

(左) 溝の断面のようなす

透台形に掘られているのがわかる。

(下) 同一の溝から出土した土器一括

土器は工房から出土する例が少ないため、このような溝の中から出土した土器が工房の稼働時期を決定する貴重な資料となる。





碧玉製玉の製作工程資料

上段左側の原料から下段右側の完成品にかけて一連の製作工程のわかる資料。(P.20)



水滸製玉の製作工程資料

上段に原料の石の断面図から下段に向かって、完成品になるまでの工程のわかる資料。(P.20)



他製玉の断面と原料(P.20)

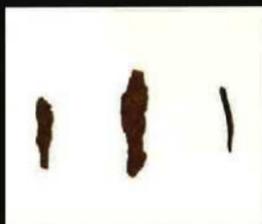


紅石製の原石

スノウの原石と破片



印石



石製加工品

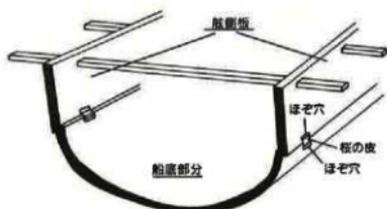
石より採り、原ノ5.200.14-P.20

石の製作に使用した原石
 大抵のものが、石の中心部、角の
 入った部分、平らな部分、角の
 入った部分、角の部分を削り
 取ったものであることがわかる。(→
 P.21)

(内内) 舷側板と船底をつなぐほぞ穴と板の皮
 板の皮を使用して舷側と船底のほぞ穴をつないでいたことがわかる。



船底部分を横から見たようす
 船底部は木を削り置いた丸木船状のものであった。



準構造船材(→P.23)

奥が船先方向で手前が船尾部分。左側の一枚板は舷側板。

準構造船の断面を復元しようす
 (日本財団図書館 船の科学館ものしり
 シート準構造船断面図より一部改変)

葦橋造船の材木を再利用した井戸

発見時、葦橋造船の部材は井戸の外枠となっていた。崩しての役割を終えた材木を再利用したものであろう。なお、この井戸の中からは大量の土器が出土しており（図下段の写真）、井戸の埋め戻しに伴って祭祀を行った時に落とし込んだものと考えられる。（→P.21）

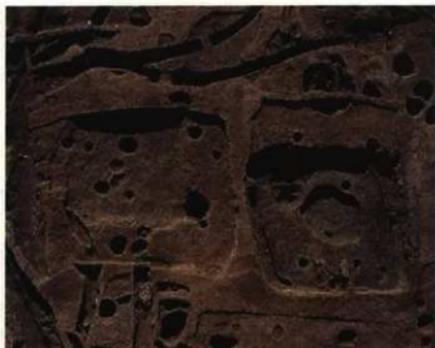


葦橋造船の復元想定図

全長約6m程度の船が想定される。
（下長遺跡葦橋造船復元想定図より一部改変）



井戸の中から出土した土器群



(最上段)弥生時代の大溝

弥生時代の集落の首尾を示すと考えられ、長さ約50mに渡って掘られている。(→P.25)

(2段目左上)西側落ち込み部分での祭祀の様子

底に穴を開けた土器が大量に出土するなど、特殊な遺物が目立つ。

(2段目右上)大溝の断面

(左上)金銅製刺装具(→P.27)

(右上)古墳時代の竪穴住居の様子(→P.26)
左側の住居内から金銅製刺装具が出土した。

(右)金銅の出土したようす





(上) 龍と思われる絵を描いた壺 (→P.24)

(右) 山陰系の瓶形土器

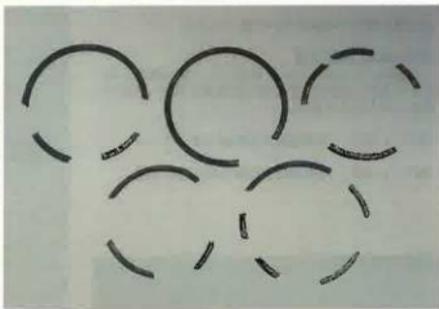
道路からは山陰のものと似通った土器が数多く出土しており、玉作の時期には山陰地域との深い係わりがあったと考えられる。



(左下) I-E区 16号祭祀土坑のようす (→P.24)

(右下) I-E区 16号祭祀土坑から出土した土器





(加上段) 銅の銅輪(銅鏡)を副葬した299号甕棺のようす(→P.27)

(左上) 銅鏡が出土したようす (右上) 銅輪の接合写真



(左端) 石刻の切先が出土した195号甕棺(→P.27) 指の先が石刻の出土した位置。

(左) 195号甕棺内から石類が出土したようす



(上)銅鏡と勾玉が出土したようす(→P.29)

↑部分から銅鏡の破片、↓部分から勾玉が↑の部分から朱(左上の写真がアップ)が出土した。散乱により蒸れてぼらぼらに散らばっているのがわかる。

(左上)朱を散布したようす。

点滅の箱の外側と思われる部分を朱で散布しているようすが見られた。



銅鏡の紐の部分が出土したようす



銅鏡 縹緗磁甕「位至三公」銘八弧内行花纹鏡(実寸)
鏡の下に「至」の文字が読める。



ヒスイ製勾玉(実寸の約3倍)



子供用と大人用の2基の木蓋土坑墓が並んで発見されたようす(→P.30)



(左)子供用の木蓋土坑墓

(上)大人の頭骨の上から鉄槌が出土したようす

鉄槌はもともと木蓋の上に預かっていたと思われる。年月を経て蓋が朽ち、鉄槌が棺内に落ち込んだものであろう。

1. はじめに

(1) 調査の契機と経過

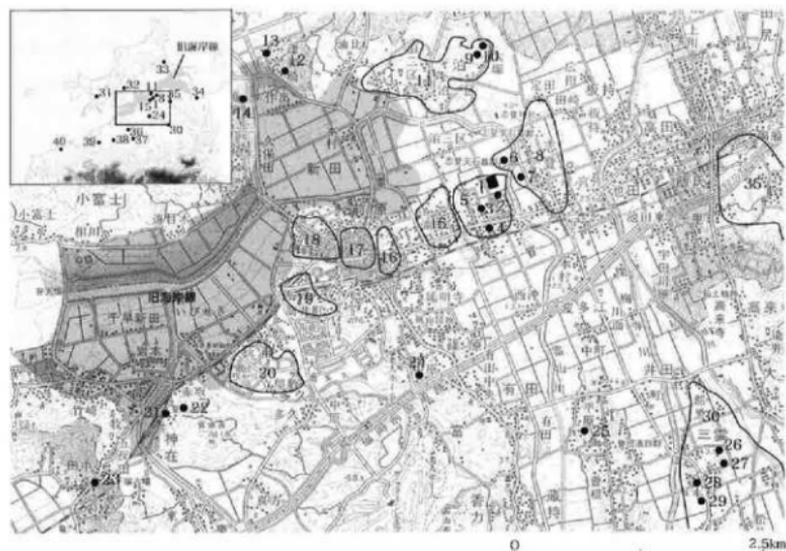
湖地頭給遺跡は福岡県前原市大字岡字地頭給地内に所在する。調査は前原市内の前原・波多江両小学校の児童数の増加に伴って策定された分離校建設の開発計画に端を発する。当該地は周知の文化財包蔵地である調査遺跡群に含まれており、周辺には国史跡の「志登支石墓群」をはじめとする重要な遺跡が分布している。このことから、調査以前にも重要な遺跡の埋蔵が想定される場所であった。

平成14年7月に調査区内の遺構の状況と内容を知るために約1ヶ月間をかけて全域を対象とした試掘調査を行った。この結果、弥生時代前期末～中世にかけての複合遺跡であることが判明し、遺構が緻密に分布している状況と旧地形が複雑に入り組んでいる様子を窺い知ることができた。これを受けて本調

査は翌、平成15年1月15日～平成16年3月19日のおよそ1年2ヶ月をかけて実施した。

調査は小学校建設予定地内を4つの調査区に分割し、これに工事用仮設道路敷き部分の1つを加えて計5工区とした。基本的に南側に位置するⅢ、Ⅳ区の運動場予定地については全掘せず、内容を確認するに止めた。中でも、大溝や東側落ち込み部での祭祀跡等の重要遺構については規模を確認するためのトレンチによる断り割り調査を実施し、現地保存とすることにした。また、北側に位置するⅠ、Ⅱ区については建築物による掘削を受ける想定される微高地上について全面調査を行い、谷部分については現状保存とした。残るⅤ区については、東側の遺構が存在する部分に限定し調査を行った。

なお、調査面積は全域に当たる40,000㎡のうち、谷部などの保存部分を除いた約半分に当たる22,000㎡である。



1. 湖地頭給遺跡
2. 朝町遺跡
3. 朝神社古墳
4. 坂谷田遺跡
5. 調査遺跡
6. 志登支石墓群
7. 志登松木遺跡
8. 志登遺跡群
9. 製造長山古墳
10. 伯大家古墳
11. 約遺跡
12. 津和崎横尾古墳
13. 後山古墳
14. 福墓古墳
15. 徳志遺跡群
16. 上町山遺跡群
17. 北本町遺跡群
18. 北新地遺跡群
19. 調井町遺跡群
20. 森嶋遺跡群
21. 益塚古墳
22. 津在横古遺跡
23. 一貴山獅子塚古墳
24. 上郷子遺跡
25. 平原遺跡
26. 舞山古墳
27. 栗山古墳
28. 三雲洲小路遺跡
29. 井原庵遺跡 (指定地)
30. 三雲・井原遺跡群
31. 新町遺跡
32. 一の町遺跡
33. 小舟遺跡
34. 今原五郎江遺跡
35. 飯氏遺跡群
36. 東遺跡群
37. 本遺跡群
38. 石崎遺跡
39. 原江井山遺跡
40. 水付遺跡

第1図 湖地頭給遺跡と周辺の遺跡 (1/50,000)

(2) 遺跡の位置と環境

潤地頭給遺跡は現在、糸島半野のほぼ中央部に位置している。この半野は南側にそびえる背振山系に源をもつ瑞梅寺、雷山、長野の3河川の沖積作用によって徐々に形成されたもので、弥生時代においては東に位置する今津湾と西の加布里湾とが内陸部にある遺跡付近まで大きく湾入していたものと思われる。したがって、かつて遺跡は現在の田園風景の中とは大きく異なり海岸近くに立地していたのであろう。また、遺跡のすぐ隣には前記の河川の一つである雷山川が流れる。この河川は背振山系を構成する雷山に源を発するもので、遺跡の東側で北流し、やや下流の北東側に至って大きく流れを西に転じ、泉川と名称を変えて加布里湾へと注いでいる。これについても、昔は遺跡のすぐ傍で海へ注いでいたと推測される。したがって、弥生時代～中世の間、この地に居住した人々は海岸と河川との接点である立地を大いに生かして、海洋と内陸との交通の要衝として栄えたものと考えられる。水に深い関わりをもつ潤という地名からもこの一端を窺い知ることができよう。

潤地頭給遺跡と同様、加布里湾の旧海岸線に沿って海浜集落と言うべき遺跡が連なるように分布する状況が徐々に、判明しつつある。まず、目を西方面へ向けると、小銅鐸の発見された諸志遺跡群をはじめ、素環頭大刀と饗椋遺群が発見された上町向原遺跡、弥生時代～古墳時代にいたる集落である北本町遺跡群や北新地遺跡群などがあり、口を東に転じると志登遺跡群、湾を挟んで北側には泊遺跡群が存在する。これらの遺跡からは素環頭系銅式土器などが出土しており、伊都国における交易の窓口として共に重要な役割を担っていたことがわかる。

また、遺跡周辺を見ると北東の周辺より一段高い沖積台地上には国史跡の志登支石墓群、西側には弥生時代～中世の遺構を包含する潤屋敷遺跡、南には円形浮文を口縁部に施した畿内系の大型の複合口縁壺を出土した潤中町遺跡が存在する。このことから、

潤地頭給遺跡を含めた周辺地域は弥生時代から中世にいたるまで数度の断絶期間が想定されるものの、人々が住み続けていた重要地点であったことがわかる。

なお、伊都国の中心域である三雲・井原遺跡群は東南方向に4kmほど離れた場所に所在する。

2. 遺跡の概要

潤地頭給遺跡の地形は大きく分けて南から北に向かってなだらかに下る2本の微高地と、これを隔てる2本の谷によって構成される。このうち、今回の調査によって最も内容が明らかとなったのは中心に位置する微高地で、主に弥生時代前期末～後期前半の居住域と墓域を含む集落、弥生時代終末期～古墳時代前期前半の土作工房群、古墳時代中期の集落、奈良時代の井戸や蔵付器等の遺構や遺物が検出された。これにより、長期に渡って人々が居住する状況が見えるとともに、広大な工房域が展開されることから糸島半島の中でも重要な拠点の一つであったことがわかる。しかしこの一方、調査前に期待されていた弥生時代早期にあたる志登支石墓群の関連遺構は発見されず、これを営んだ人々の集落の位置については今後の課題として残った。

また、調査区西側（I-W区、III-W区）に位置する微高地の裾部分からは弥生時代中期の溝、中世の塚、領貫の井戸などが発見されている。したがって、調査区外に当たる西側の尾根部分には弥生中期～中世までの集落が展開しており、特に中世には豪族の居館的な役割を持った建物が存在する可能性が示唆された。加えて北東側のV区の調査によって、志登支石墓群周辺の地形が明らかとなり、昭和28年に行われた文化庁による調査時に言われていたとおり、周りに比べ一段高く見晴らしの良い沖積台地上に営まれた状況がより明確となった。

3. 玉作関連の遺構と遺物

(1) 玉作工房

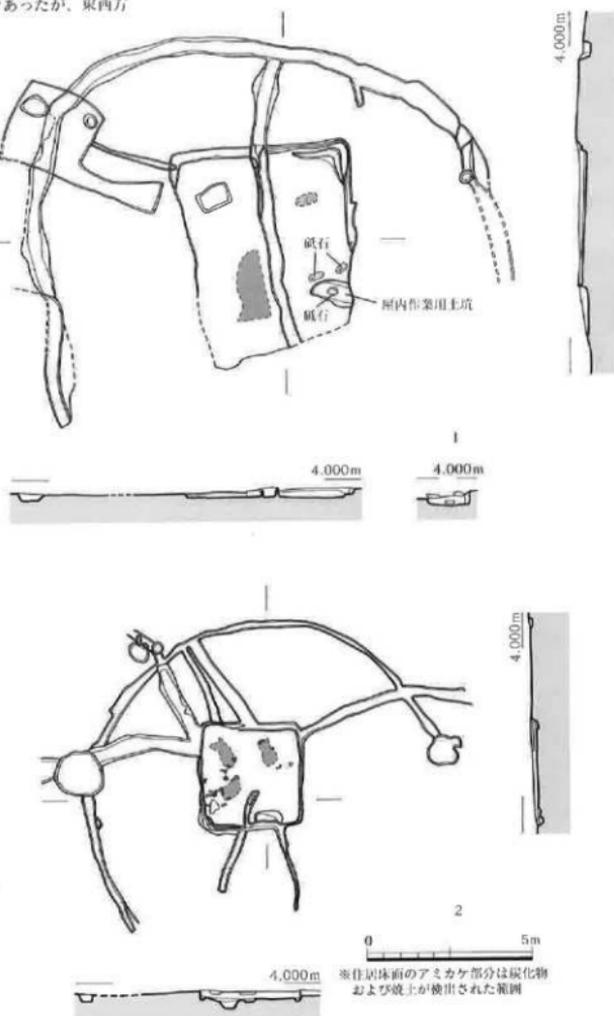
玉作工房は調査区の中央部に誕生する微高地上に広がる。工房域は北限については調査区外に続いているため窺い知ることは不可能であったが、東西方向については数部幅一杯に広がっている状況が判明した。検出された部分で南北130m、東西80m、面積約9600㎡以上の広大な面積を占めていた。工房はこの区域内に33軒が営まれており、微高地の頂上部分が現況で大きく削平されていたことから、かつてはより多く存在したことが想定される。

工房は竪穴住居の形態をとり、平面プランは隅門方形または不正隅門長方形で床面に柱穴を持たず、周側に円形の排水を巡らせるものが多い。したがって、七層構造は切妻屋根を穿き下ろしたいわゆるテント状の簡易的なものであったと考えられる。しかし、中には6.2m×4.2mの比較的規模の大きなものも存在し、柱のない構造では不安定であると思われるため、作業場を広く確保するために、床面の柱を意図的に除いたということも考えられる。なお、例外的にⅡ区22号住居のみは1本の主柱穴をもつ。

工房群は遺物と施設の検出状況によって大きく3つに分けられる。①限内に作業用の施設を持ち、工具類や石材が出土する

もの、②施設はないが石材の出土を見るもの、③これらはないが構造が類似するものとに分かれ、可能性の高低があると考えられる。なお、名称については竪穴住居の形式を採っているためこれを用いた。

以下、2軒の工房について見て行きたい。



第2図 I-E区 10号住居およびⅢ-E区 1号住居実測図 (1/150)

Ⅰ-E区 10号住居(図2-1) 平面形態は隅四長方形で、周囲に半円形の溝を巡らせる。規模は約6.2m×5.5mで床面には柱穴がなく、斜面上部の東側にのみ壁溝を有する。屋内の玉作製作に関連する施設としては西南の隅に作業用の土坑が掘削されており(図2-1、P.5)、この内側から砥石が1点、周辺から2点が出土している。また、床面には2ヶ所ほど焼土と炭化物の混じった部分があり、炉の可能性が考えられ、玉の製作途中で火を加えるための施設であったと思われる。石材としては碧玉と水晶の2種類の未製品や剥片、チップが出土しており、多様な玉を製作していた可能性がある。なお、住居の中心を貫く溝は重複しているものであり、廃絶後に掘削されたものと思われる。

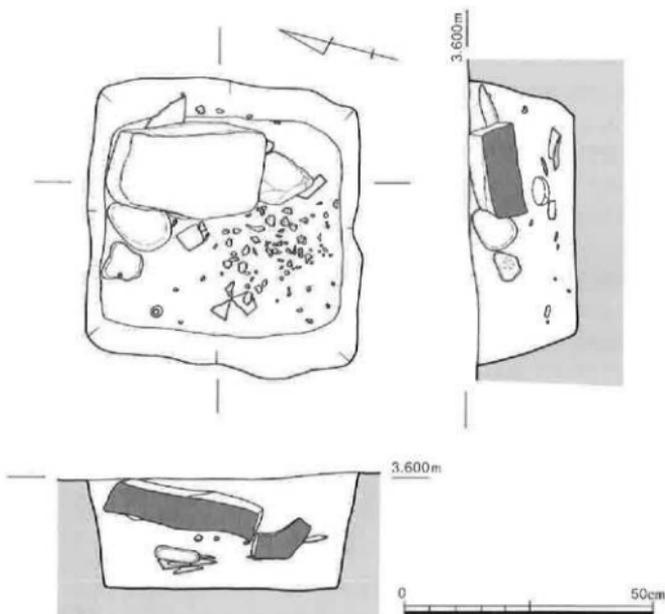
Ⅲ-E区 1号住居(図2-2) 工房域の南限に位置する。平面形態は隅四方形で、規模は工房群中最

も小さく、約2m×2mの規模をもち、周囲に円形の溝を巡らせる。屋内には全周に壁溝を巡らせ、西側の斜面上部に向けて排水を行う。屋外の円形溝と壁溝の間は5本の溝で接続されている。床面には3ヶ所の炭化物の分布する部分があり、火を使用した可能性が考えられる。(江野)

(2) 屋外土坑

Ⅰ-E、Ⅱ区を中心に屋外の作業用土坑または廃棄土坑が確認されている。この中でも、Ⅱ区の21号住居の南隣に位置する20号土坑は、水晶剥片と石製工具が一括で確認されている(図3、P.8)。

土坑は、長さ57cm、幅55cm、深さ23cmの正方形を呈するもので、上層からは、平砥石3個、叩き石1個が出土している。平砥石の下層からは、大型壺の口縁部片、長胴壺の口縁~胴部片などが出土して



第3図 Ⅱ区 水晶作業用土坑実測図(20号土坑) (1/10)

おり、弥生時代後期後葉～終末期に比定される。水晶は、上下層共に多く見られたが、全て切片のみで、製品、未製品が発見されていない。出土状況から、住居内で行われた水晶の刻削調整終了後に、屋外土坑に廃棄されたものと考えられる。

また、この他にも、碧玉片が少量、滑石製の玉が1個出土している。

(3) 使用石材と工具

石材と製品 (P.8, 9) 本遺跡から出土した石材としては碧玉、水晶、メノウ、鉄石英、蛇紋岩がある。出土数としては碧玉が最も多く、次いで水晶が出土し、メノウ、鉄石英、蛇紋岩についてはごく少量である。遺跡全体での出土量は、碧玉で約2kg、水晶で約560gと玉作遺跡にしては少量である。

一方、出土傾向として、I-E区の工房域からは碧玉、II区の工房域からは水晶がそれぞれ多く出土する。このことから、碧玉を使用する工房と水晶を使用する工房は立地を異にすることが考えられるが、I-E区8号住居では碧玉よりも水晶が目立って出土している。仕上げのみなど各生産工程における副次的な生産として行われた可能性も考えられる。

碧玉は九州では原産地が確認されていないが、肉眼的な観察では島根県花仙山産の碧玉に類似している。また、祭祀土坑や玉作にともなう排水溝からは山陰系瓊形土器などが見られることから、山陰との関係が深いと考えられる。

水晶は地元の原石を用いている可能性があり、糸島半島では基盤岩である花崗岩、花崗閃緑岩の中に貫入する石英鉱脈に見られる。水晶の原産地として、福岡市西区叶ヶ岳、二丈町浮岳、志摩町立石山などが挙げられるが、いずれも原産地としての確定が行われていないため、今後の検討課題である。

本遺跡では碧玉製管玉、水晶製小玉・丸玉・算盤玉、蛇紋岩製勾玉が製作されていることが明らかになっており、各製作工程が追える資料がある。

製作技術の概要について述べると、碧玉製管玉は

①原石②鉄製工具を用いて、方形に近いまで粗削を行う③角柱体を作りやすいように、意図的に鉄製工具の打面を作り出し④角柱体を作り出す⑤角柱体の稜を削ぎ落とす⑥目の粗い砥石で研磨して丸みを出す⑦両側から鉄錐で穿孔する⑧目の細かい砥石で研磨して、きれいな丸みと光沢を出して完成という工程で、太形のものと同形のものがある。

一方、水晶製小玉・丸玉・算盤玉については①原石②原石の基部と頂部を先に除去して、六角柱を作り出す③六角柱の稜を削ぎ落とす④中心から縦割りをして半分にする⑤縦打して丸みを帯びさせる⑥片側から鉄錐で穿孔する⑦目の細かい砥石で研磨して、きれいな稜と光沢を出して完成となる。

蛇紋岩製勾玉は、小ぶりで扁平なものであるが、製品、未製品が出土しているものの工程まで追える資料が出土していない。メノウ、鉄石英に関しても資料不足のため、製品までの特定ができないが、他地域の玉作遺跡の事例から、時的的にメノウ製勾玉、鉄石英製管玉を製作していたと考えられる。

工具 (P.9) 碧玉、水晶の玉作に伴う工具には砥石、叩き石、鉄製加工具などがあり、住居内や排水溝、土坑から出土している。

砥石には、全面研磨に使用されたと考えられる筋砥石と筋のつかない平砥石があり、遺跡全体では50点以上にのぼる。筋砥石には、筋の断面がU字形のものとV字形のものがある。平砥石には、大型から小型のものまで多種多様であるが、大型のものは目の粗い砂岩が利用されることが多く、小型のものは粘板岩が利用される傾向にある。

鉄製加工具は、打割具である槌状鉄製品と穿孔具である錐状鉄製品が出土している。錐状鉄製品は細いもので長さ1.15cm、幅1mmを測り、断面が四角状となる。槌状鉄製品は長さ3.5cm、幅1cm、厚さ0.4cmの板状鉄製品で、原石や結晶体の打割に用いられたのであろう。

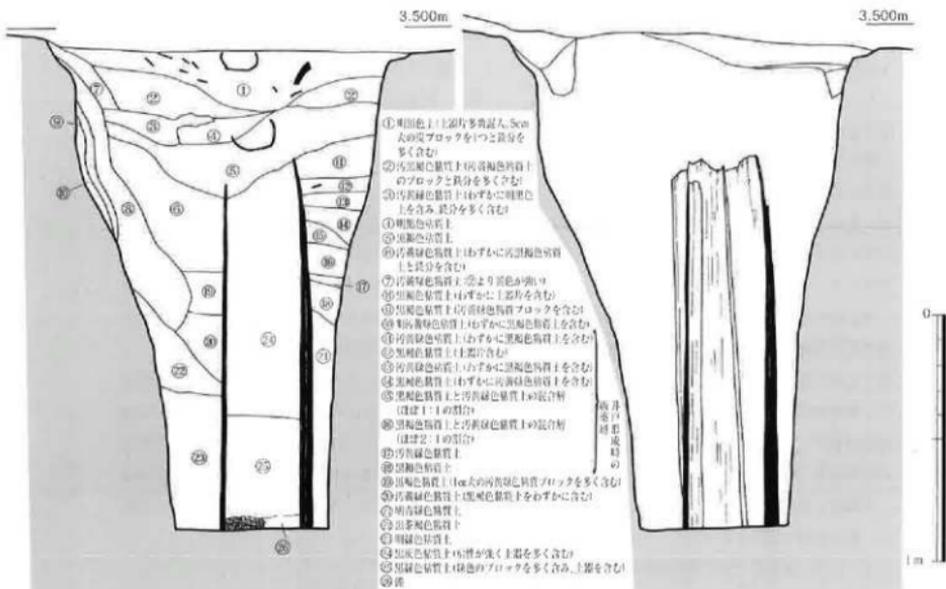
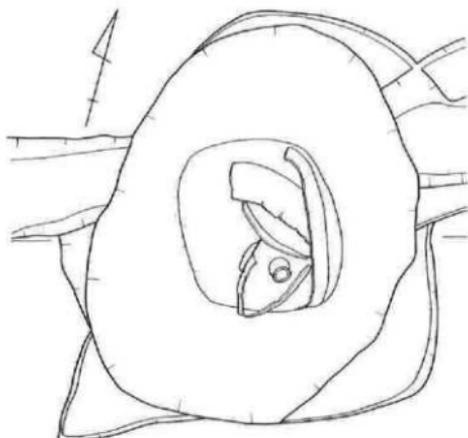
4. 準構造船

また、井戸の底面には砂利を敷いており、排水作用があったものと思われる。

(1) 井戸 (図4、P.10・11)

II区東側谷部付近で井戸枠が良好に残る井戸を検出した。掘り方は長さ4m、幅3.3mの不整形を呈する。II区10号住居の谷部に向かって流れ込む排水溝を切り込んで作られている。井戸は、径60cm、深さ約2mを掘り、井戸体は土圧によって内部へ動いた状態であり、計6枚の部材によって円形に構成されている。

井戸枠内からは長頸壺、短頸壺、庄内式土器を含む約20個体の土器が検出され、口縁部や胴部の打ち欠きや中に朱の痕跡を残すものが認められることから、井戸を廃棄する際に祭祀が行われていたと考えられる。



第4図 II区 井戸実測図 (1/20)

(2) 準構造船部材 (図5、P.10)

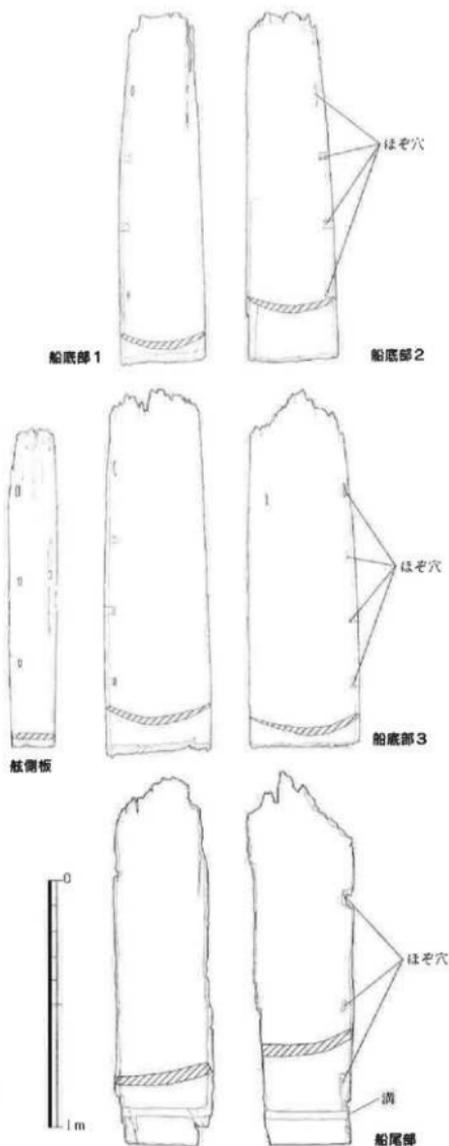
井戸杵の取り上げ過程の中で、準構造船部材を転用したものであることが明らかになった。出土した部材は船底部3枚、船尾部1枚、舷側板1枚の計5枚である。

船底部は最大で、残存長約1.5m、幅82cm、厚さ3.5cmを測り、断面がU字形を呈する。両舷には25cm間隔のほぞ穴が見られ、板の削皮と考えられる木栓が良好に残る。船の外面のほぞ穴には舷側板を取り付けるための面取り調整がなされている。船尾部は長さ1.2m、幅65cm(最大)、厚さ4.5cmを測り、両舷にはほぞ穴が見られ、溝を切って板をはめ込む仕口が施されており、船尾部分と考えられる。舷側板は長さ1.5m、幅23cm、厚さ2.5cmで、ほぞ穴が見られるが、船底部、船尾部のほぞ穴とは間隔が合わず、2隻以上の船を解体して、井戸杵に転用している。

福田さよ子氏(奈良国立歴史考古学研究所)による樹種鑑定の結果、船底部、舷側板についてはスギ材、船尾部についてはクスノキ材を使用している。

船の湾曲や幅に対する長さの比率から全長6m前後を想定しており、船尾部の仕口から、福岡市吉武高木遺跡群から出土している木製模造船と同じく、船首と船尾を作り分けた形の船であったと考えられる。

時期については船が使用され、転用、廃棄されるまでの期間を考慮し、弥生時代後期後葉～終末期と考えたい。この時期は玉作の時期とも重なり、玉の原材料や製品などの搬入、搬出に使用されたのであろうか。(江崎)



※船底部1と2は接合せず別個体。船底部3と船尾部のそれぞれの2枚については同一個体である。

第5図 準構造船部材実測図 (1/20)

5. 祭祀土坑

(1) 遺構

祭祀土坑は大きく弥生時代中期後半と後期後半から古墳時代前期前半の時期に作られている。このうち、前者は豊碓墓群に伴う祭祀坑と考えられ、後者は玉作工房群の時期とはほぼ合致する。以下後者の土坑の内、二基を抽出してみたい。

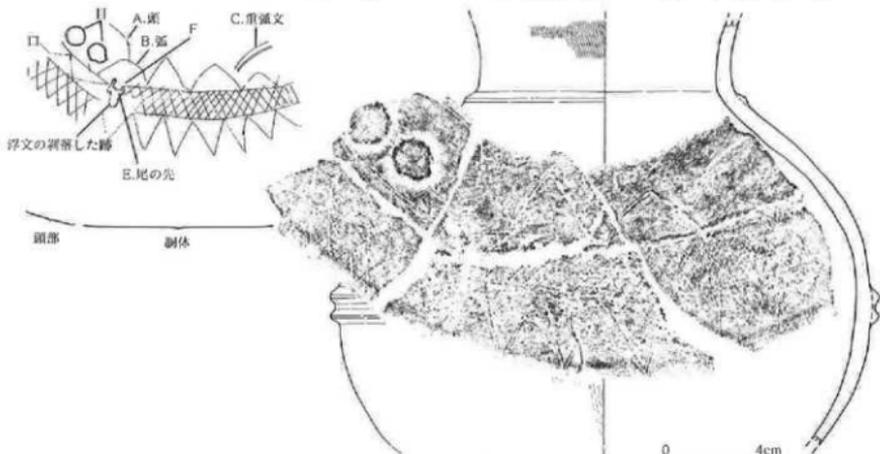
I-E区 20号祭祀土坑 (図7-1) 平面は不正形で、底部は皿状を呈する。土坑内からは弥生時代終末期の土器が多く出土しており、口を引くのは山陰系の甔形土器 (P.13) と内面に朱が付着し、外面に煤の痕跡が見られる土器である。このうち、甔形土器は高さ約30cmと横方向の把手が一ヶ所残存する。作りは粗雑で内面はタテハケ・外面はヨコハケを施し、甔壁は1cm~0.7cm前後で分厚い。なお、甔形土器は他に土坑や溝、ピットからも数点出土しているものの完形になるものはなく、使用方法については疑問が湧く。また、調査区全域からは数多くの山陰系の土器類が出土しており、本遺跡と山陰地域との繋がりの強さが示唆される。

I-E区 16号祭祀土坑 (図7-2, P.13) 平面は不正形で、底部は20号祭祀土坑同様に皿状を呈する。土坑の中央付近からはほぼ完形の高坏が1圧で

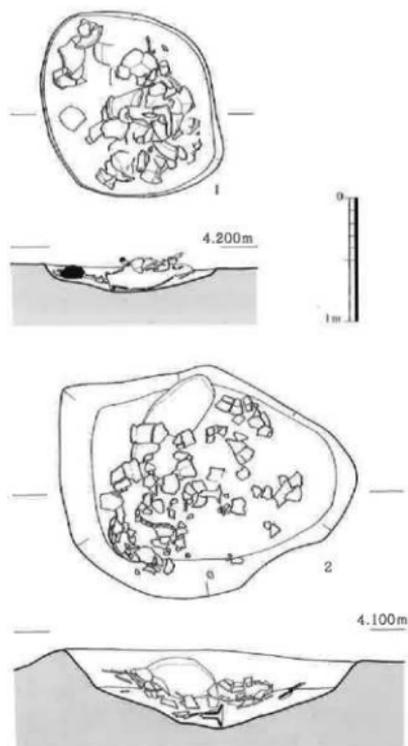
覆れた状態で出土しており、時期を知る貴重な手掛かりとなっている。

(2) 出土遺物

甔と思われる線刻を施した甔 (I-E区10号祭祀土坑出土。図6, P.13) 頸部から胴下半部にかけておよそ1/3が残存した状態で出土した。まず、土器の調整については線刻を描いている胴部はナデ消し、頸部の突帯に近い部分では横方向のナデ消しを行っている。また、胴部中位の突帯から下と頸部の上半部についてはハケ目をナデ消しているもの粗く、ハケ目が部分的に残る。内面はハケを行った後、粗いナデを施している。全体的にみて、線刻を行っている部分以外の調整は粗い印象を受ける。なお、遺構内に同一個体の土器片が出土していないことから、祭祀に伴って土坑外で破砕されたものを坑内に廃棄した可能性が示唆される。時期については弥生時代後期後半~終末期に属すると思われる。つづいて線刻についてみていく。線刻は胴部の貼付突帯と胴部中位の二重突帯の間に描かれている。大きく鋸歯、斜格子、弧と浮文によって構成されており、左側に頭部、右側に胴部を配置する。頭部には円形の浮文で「目」、鋸歯文で口の中の「歯」、Aの一重の弧で頸の輪郭を表現している。また、胴部の背と腹には



第6図 甔と思われる線刻のある甔実測図 (1/2, 1/4)



第7図 I-E区 20号および16号祭祀土坑実測図 (1/40)

鋸齒文で罽(鬘?)を、胴体には斜格子文で罽を表現している。頭と胴の間のEの部分には浮文状のものが剥落した痕跡が残っており、Fの位置で線を決めている。これらからE~Fのラインで一度絵が終わり、かつては浮文等で尾の先端を表現していた可能性が考えられる。したがって、頭部には左側から胴体が接続していたと想定され、描かれている龍が一端の場合は肩部を反時計回りに回り、二頭の場合は対角線上に頭が配置されていたものと思われる。なお、A、B、Cは先の丸い工具で描かれており、線が柔らかく浅く、他は先の鋭い竹筥か刀子状の工具を使用している。

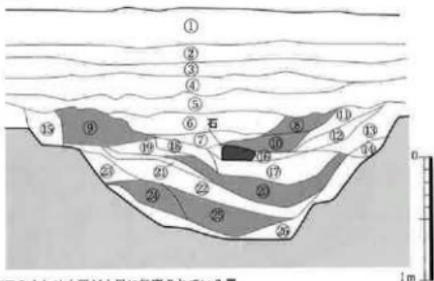
6. 弥生時代の集落

弥生時代の集落は前期末から後期前半まで営まれ、中期後半に盛期がある。居住域は大溝を南限とし、微高地の南から北東方向に向かって広がる(P.2, 3)。住居については竪穴住居が検出されなかったため、竪立柱や壘立であったと考えられる。土器以外の主な出土遺物としては石鏝や土鏝等の塗器具、石庖丁等の農具、工具、石剣や投擲等の武器類が出土しており、生産形態を窺うと共に社会背景を知る上での貴重な資料となった。

III-E区 大溝(図8, P.12) 大溝は微高地を東西に断ち切り、約50mの長さに渡っている。幅と深さは残りのよい部分で約4m×1.5mで断面は逆台形を呈する。中から大量の土器が出土しており、大きく3時期に分けて投棄した様子が観察できた。しかし、それぞれの層の土器を比較したところほとんど時期差が見られないことから比較的短期間に埋まったことが想定される。なお、大溝東端の微高地の落ち込み部分では祭祀が行われており、底部に焼成後の穿孔を行った土器などがまとまって出土している。

(江野)

5.500m



※アミカケは土器が大層に散策されている層

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| ① 前期赤土 | ② 前期赤土 | ③ 前期赤土 | ④ 前期赤土 |
| ⑤ 前期赤土 | ⑥ 前期赤土 | ⑦ 前期赤土 | ⑧ 前期赤土 |
| ⑨ 前期赤土 | ⑩ 前期赤土 | ⑪ 前期赤土 | ⑫ 前期赤土 |
| ⑬ 前期赤土 | ⑭ 前期赤土 | ⑮ 前期赤土 | ⑯ 前期赤土 |
| ⑰ 前期赤土 | ⑱ 前期赤土 | ⑲ 前期赤土 | ⑳ 前期赤土 |
| ㉑ 前期赤土 | ㉒ 前期赤土 | ㉓ 前期赤土 | ㉔ 前期赤土 |
| ㉕ 前期赤土 | ㉖ 前期赤土 | ㉗ 前期赤土 | ㉘ 前期赤土 |
| ㉙ 前期赤土 | ㉚ 前期赤土 | ㉛ 前期赤土 | ㉜ 前期赤土 |
| ㉝ 前期赤土 | ㉞ 前期赤土 | ㉟ 前期赤土 | ㊱ 前期赤土 |
| ㊲ 前期赤土 | ㊳ 前期赤土 | ㊴ 前期赤土 | ㊵ 前期赤土 |
| ㊶ 前期赤土 | ㊷ 前期赤土 | ㊸ 前期赤土 | ㊹ 前期赤土 |
| ㊺ 前期赤土 | ㊻ 前期赤土 | ㊼ 前期赤土 | ㊽ 前期赤土 |
| ㊾ 前期赤土 | ㊿ 前期赤土 | ㊿ 前期赤土 | ㊿ 前期赤土 |

第8図 III-E区 大溝a区土層断面図 (1/40)

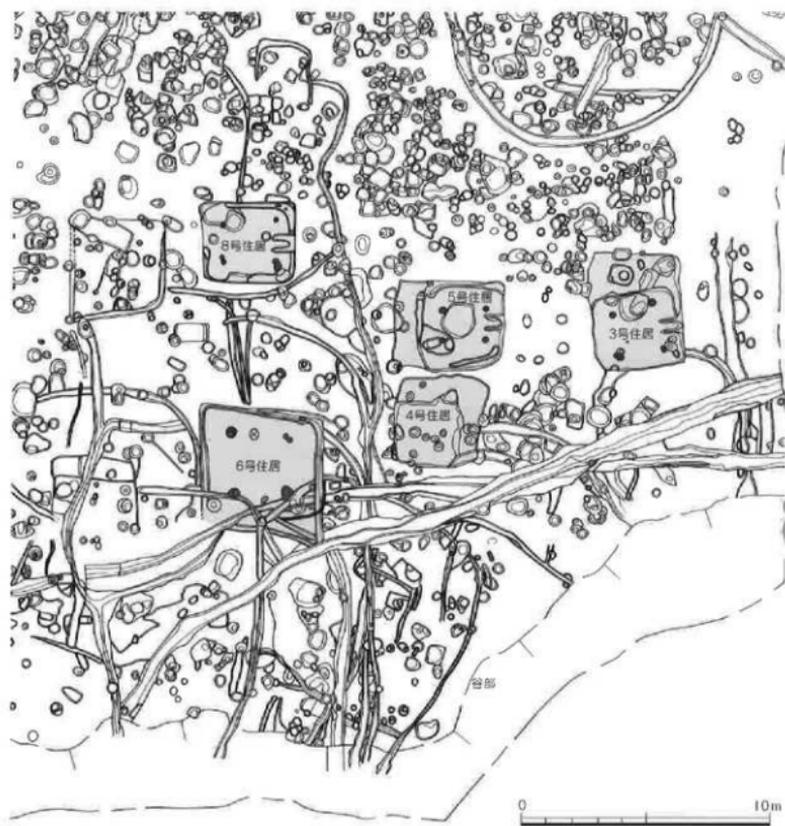
7. 古墳時代の集落

(1) 竪穴住居 (図9、P.12)

3~6、8号竪穴住居はII区北側に位置し、5世紀末~6世紀前半の時期である。これらの住居は半円形に巡る溝によって区切られており、各部に向かって掘削されていることから、排水を兼ねていたのであろう。残りの良いものは長方形プランで、長方形の掘り方の中に1段のテラスと方形の掘り方をもち、四柱穴の構造である。

3、5、8号住居は北壁にカマドをもつ住居で、その中でも、8号住居は炭化した屋根材が床面で確認された。6号住居では $6\text{m} \times 4 + \alpha\text{m}$ と他の住居より一回り大きいのが、住居内には壁沿いに排水溝を巡らし、外の排水溝と連結する。埋土から金釧、鉄片、磁石等が検出され、鍛冶炉は発見できなかったが、鍛冶工房であった可能性がある。

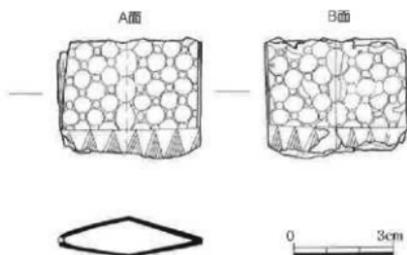
一方、4号住居はし字のベッド状遺構をもつ特殊な建物で、ベッドから金銅製剣装具が出土している。



第9図 II区 古墳時代の竪穴住居遺構配置図 (1/200)

(2) 金銅製剣装具 (図10、P.12)

4号住居のベッド状遺構から出土した金銅製剣装具である。長さ3.6cm (残存)、幅4.3cm (残存)、厚さ1.2cm (後部分) を測る。毛彫りによって割付線を施し、割付線の上側には六角文と小六角文を組み合わせた文様を施し、下側には剣歯文 (鋸歯の中に斜線) を施す。上側の文様は、稜から左右に毛彫りしており、端部へ行くにつれて、六角形が崩れている。六角文の配置から、亀甲状を意識しているのであろうか。A面、B面ともに同文様が施され、鍍金するが、B面は風化が著しい。断面形状から、剣装具を想定している。(江崎)



第10図 II区 4号住居出土金銅製剣装具実測図 (2/3)

8. 弥生時代の墓

(1) 甕棺墓

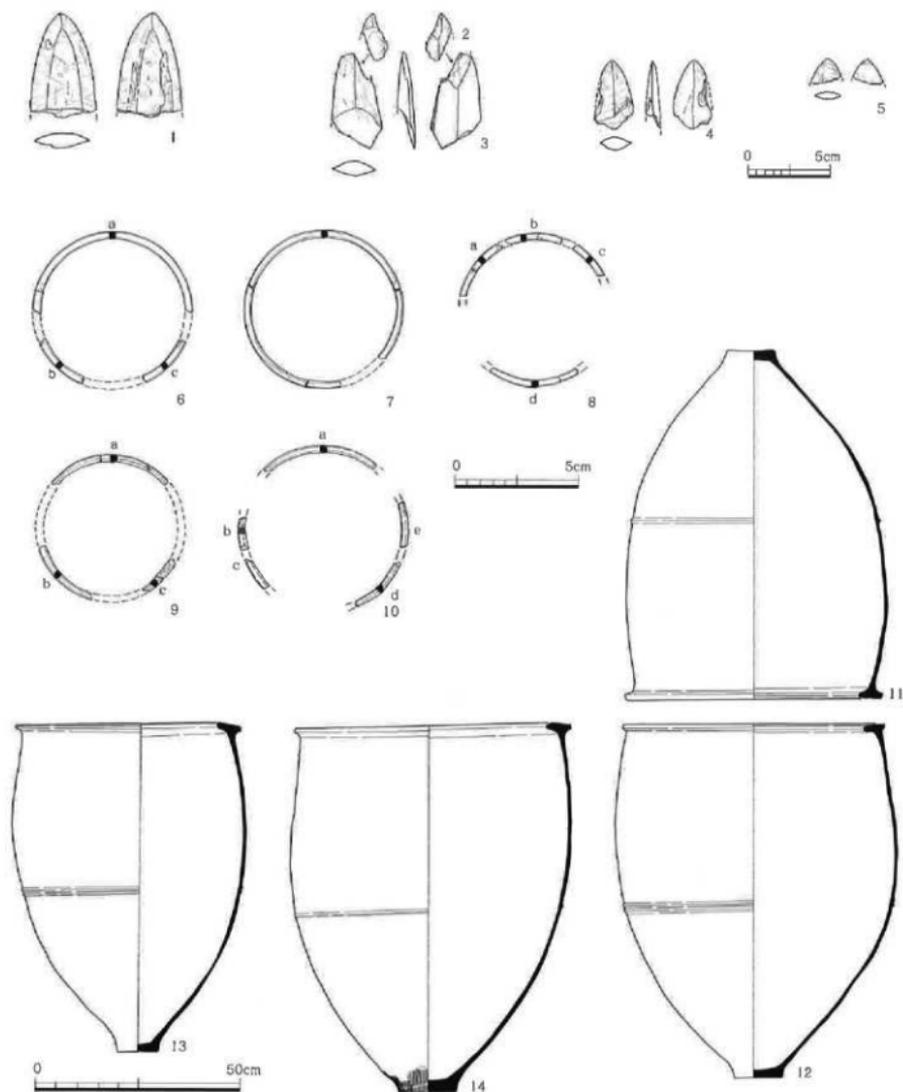
甕棺墓域は微高地上の北西部分に広がる。墓域の北端は調査区外に延くため確認できなかったが、南北約100m、東西約30mの範囲が検出され、東側には居住域との境界を示す溝が南北方向に掘削されている可能性がある (P.2)。甕棺墓は小児、成人合わせて360基が検出されている。甕棺からの出土遺物は少なく、円環形銅剣を副葬しているものが1基、石剣の切先部分の遺存するものが2基であった。以下、これら3基について見て行きたい。

なお、墓域の営まれた時期は弥生時代前期末頃から後期の前葉頃までと考えられる。

299号甕棺墓 (図11-6~12、P.14) 上甕 (11)

は器高80.9cm、口縁部径63.1cm、底部径11.7cm、胴部最大径57.6cmである。胴部にやや丸みを帯び、低い三角の1条突帯を巡らせる。下甕 (12) は器高86.5cm、口縁部径64.2cm、底部径11.5cm、胴部最大径69.0cmである。口縁部は内傾し、胴部にやや丸みをもち、低く緩のあまい三角の2条突帯を巡らせる。この上下棺はいずれも内外面に黒塗を施していると思われるが、下棺については風化による剥落が激しい。時期は11b期にあたる^B。つづいて副葬品である銅劍は上甕の口縁部のすぐ下から出土しており、土圧によって折れて散乱した状態であった。断面形態や径などを元に、接合を行った結果、5本以上である可能性がた。それぞれの個体について述べると、6は直径6.5cm、断面はやや扁平な長方形で2.5mm×3mmである。4片に分かれており、aの部分で2片のみが接点をもつ。このうち、aとbは断面形態および色調等類似しているため同一個体である可能性が高いがcについては表面の風化が激しく、断定はできなかった。7はもっとも残存状態の良好な銅劍である。直径6.7cm、断面形と太さは6と同様である。4片に分かれており、完形とはならず途中が1箇所抜ける。8は直径6.2cm、断面形と太さは6と同様である。7片に分かれておりa、b、dはそれぞれ2片が接点をもつ。断面形態と色調からa、b、cは同一個体の可能性が高い。9は直径6.05cm、断面形態は半円形を見するいわゆる蒲鉾形で、3mm×3mmの太さである。残存状況が悪く、6片に分かれ、a、b、cの径は同一であるが接点をもたず、bについては色調が他のものとやや異なるため、同一個体と断定するに至らなかった。10は直径6.9cm、断面形と太さは9と同様である。7片に分かれており、aでは3片が接点をもつ。色調や断面形態から、bとc、dとeは同一個体の可能性があると考えられる。

195号甕棺墓 (図11-2~5、13、P.14) 甕棺は単棺で器高80.9cm、口縁部径55.3cm、底部径9.9cm、胴部最大径57.6cmである。口縁部は外傾し、胴部



第11図 I-E区 墓槽および墓槽基出土遺物実測図 (1/3、1/2、1/12)

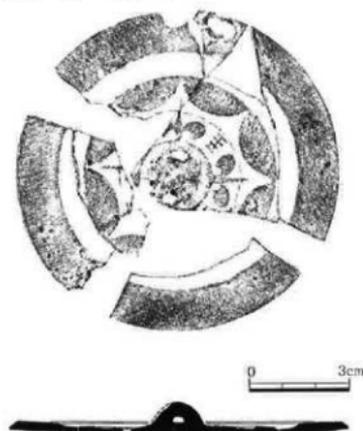
には低い三角の突帯を2条巡らせる。時期はIIb期にあたる。棺内からは石剣の切先が3本分出土した。このうち、2と3は同一個体であり接合するが、分離した状態で発見された。したがって、被葬者の体内において折損した可能性がある。

14号壘棺墓 (図11-1・14) 単棺で附高90.5cm、口縁部径67.5cm、底径13.8cm、胴部最大径68.5cmであり、低い三角の突帯を1条巡らせる。全体にナデを行うが、底部付近にハケ目が見える。時期はIIb期にあたる。棺内からは石剣の切先が1点出土した。刃の先端と両側が欠損し、割傷痕も見られる。

(2) 鏡出土土坑

鏡の出土状況 (図13、P.15) I-E区の西側、谷への傾斜部分の近くに位置する。墓坑は約2.2m×1.4mの大きな攪乱を受けており、副葬品である鏡やヒスイ製の勾玉は攪乱坑内に散乱した状況であった。

わずかに攪乱を免れた北東部分の隅を観察すると、棺の内外に朱を撒いた痕跡が見られた。この部分を起点としてかつての墓坑の姿を想定すると幅約1m、長さ3m以上で底面は船底形を呈していたものと思

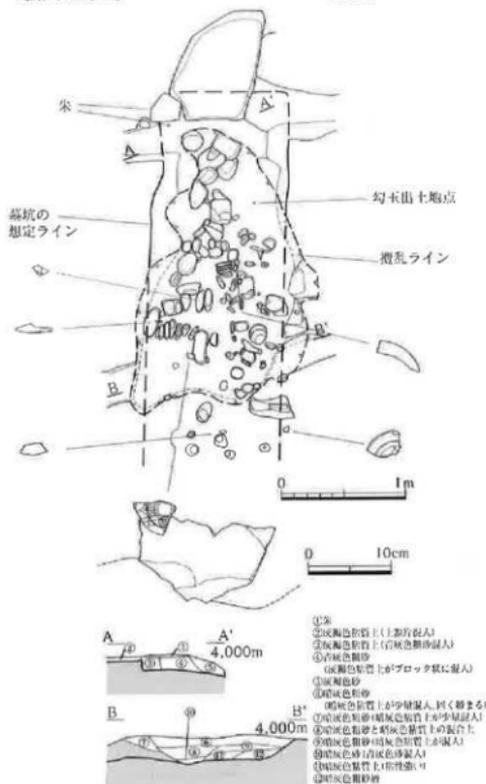


第12図 I-E区 蟻蜂産鉦「位至三公」鏡八弧内行花文鏡実測図 (2/3)

われる。また、墓坑周囲の地形を見ると一段高くなっており、盛土や高溝などは観察されなかったものの墳丘などの区画が存在した可能性がある。時期については不明であり、今後の課題である。

銅鏡 蟻蜂産鉦「位至三公」鏡八弧内行花文鏡 (図12、P.15) 8つの破片に分かれて出土した。復元径は10.2cmで端部がやや反る。銘文は「至」の字のみが残っており、他の文字は出土していないが、かつては「位」「三」「公」があったと推測される。

ヒスイ製勾玉 (P.15) 攪乱坑内の南東部にから出土した。小型で1.5cm×0.9cm、厚さは4mmで、丁寧な作りである。(江野)



第13図 I-E区 鏡出土状況実測図 (1/6、1/40)

9. 古墳時代の墓

(1) 木蓋土坑墓 (P.16)

II区北端に位置し、2基の土坑墓が検出された。

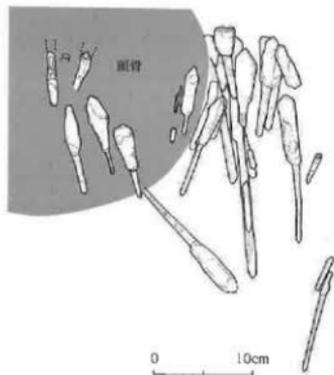
1号木蓋土坑墓 (図15-1) 長さ約1.7m、幅約68cm、深さ約30cmを掘り、人骨が良好に残存している。副葬品は、鉄鍔約20本が人骨の頭部に落ち込むように検出された (図14)。また、脚部付近にも高坏片が見られることから、木蓋が存在したと考えられ、鉄鍔は頭部付近に柄外副葬されていたのであろう。

人骨は身長160cm前後で40歳前後の熟年男性であった。

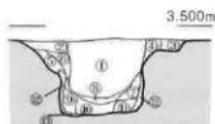
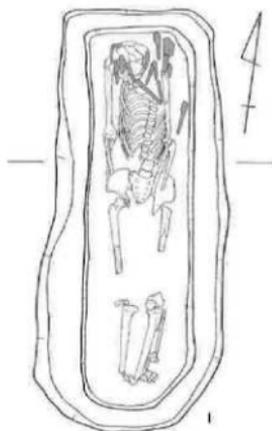
鉄鍔は、柳葉形で欠柄まで良好に残っているものもあるが、形式より古墳時代前期と考えられる。

2号木蓋土坑墓 (第15図-2) 長さ約1.25m、幅約79cm、深さ約15cmを掘り、副葬品は無いが、人骨がかわらうじて残存していた。奥歯が永久歯に生え変わっていたことから7歳前後の小児骨で、性別については不明である。

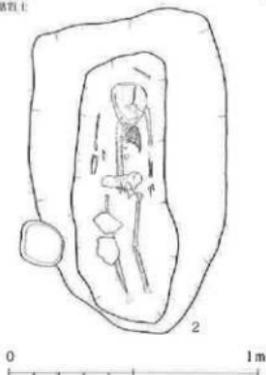
古墳時代前期の人骨で、良好に残っている例は少なく、副葬品も比較的良く残存していたため、人骨を含めた遺構の切り取り作業を行った。このような保存は、九州でも稀であり、注目される。



第14図 II区鉄鍔出土状況実測図 (1/5)



- ①赤褐色土質土 (赤褐色のブロックを含む。土層が多く重なり)
 - ②灰褐色土質土 (明黄褐色のブロックを含む)
 - ③黒褐色土質土
 - ④白褐色土質土
 - ⑤黒褐色土質土 (明黄色のブロックが混じる)
 - ⑥明黄色土質土 (白褐色のブロックが混じる)
 - ⑦明黄色土質土 (明黄色の埴山ブロックを多く含む)
 - ⑧明黄色土質土 (明黄色の埴山ブロックを多く含む)
 - ⑨明黄色土質土 (明黄色の埴山ブロックを多く含む)
 - ⑩赤褐色土質土 (赤褐色のブロックを含む)
 - ⑪赤褐色土質土
 - ⑫赤褐色土質土
- 木蓋の上の
土
- 流れ込み
- 木棺痕跡?



第15図 II区 1号および2号木蓋土坑墓人骨出土状況実測図 (1/20)

(2) 人骨の取り上げ

人骨の取り上げ作業の概要について以下に説明する。



①遺構の周りを掘り下げ、凸状に成形する。



②合板で挟み、仮補強した後、濡らした紙タオル、アルミホイルで表面を保護する。



③発泡ウレタンを流し込む。



④板を遺構の下に打ち込み、神輿状にしたのち、運び出す。室内で裏返しにする。

⑤裏側から余分な土を除去し、裏面にシリコーン樹脂を流し、ダンボールで外枠を作る。



⑥ポリエステル樹脂、FRPによる底面の強化



⑦裏返し、表から慎重にウレタン樹脂を除去する



⑧バインダー17を塗布して、仕上げる。

10. おわりに

以上、遺跡の内容を概観的に見てきたが、ここで特徴を簡単に述べたい。

本遺跡は弥生時代中期～中世にかけての複合遺跡であるが、やはり注目されるのは玉作遺跡であろう。

九州において碧玉を出土した遺跡は弥生時代後期後半以降を挙げると、福岡市博多区博多遺跡群第17次調査（弥生時代後期後半）、甘木市平塚川添遺跡（弥生時代後期後半）、福岡市早良区西新町遺跡第12次調査（弥生時代終末～古墳時代初頭）などがあり、碧玉の原石および碧玉製品が出土している。この中で、博多遺跡群第17次調査では竪穴住居の床面や土坑から、碧玉剥片が出土し、平塚川添遺跡では住居および溝から碧玉製碧玉の製品や木製品が出土している。これらの調査では残念ながら原石から製品までの製作工程を迫る資料は出土していないが、小規模ながらも碧玉の玉作が行われている。また、西新町遺跡では河原や海辺から採取した凝灰質泥岩を使用し、研磨を非常に多用した勾玉製作を行っているほか、ガラス製勾玉や丸玉、小玉の跡が出土している。

水晶では福岡市東区三苦永浦遺跡や前原市三雲サキノ遺跡があり、特に三苦永浦遺跡の7号竪穴住居の壁際土坑からは多数の水晶の剥片が検出されており、注目される。ここでは一般的な竪穴住居で製作されており、他の住居でも、非常に少量の出土ではあるが、水晶の玉作が行われていた可能性が高い。

一方、本遺跡では、本格的な玉作が行われており、特徴として、以下の4点が挙げられる。

- ① 工房は9600㎡以上の広大な面積に多数存在し、この時期に見られるような一般的な竪穴住居にない独特の形態である。加えて碧玉や水晶製玉類の製作過程を迫る資料の出土、それに伴う鉄製工具の出土などから鑑みて、専門的な玉作集団と考えられる。
- ② 碧玉の出土総数は、山陰や北陸など原産地近

くの玉作遺跡と比べると少ないが、これは碧玉のほとんどが花山山産であり、原石を搬入して玉作が行なわれるという特徴を反映したものと考えられる。

- ③ 鉄製工具の使用や工房を円形に取り囲む排水溝などは、平所遺跡（杵根県松江市）や林・藤島遺跡（福井県福井市）などに見られるが、水晶については、平所遺跡と共通する技法が見られること、山陰系土器の出土、碧玉の原産地であること等から、特に山陰地方との強い結びつきが想定される。¹⁰⁾
- ④ 調地頭給遺跡と山陰地方における花山山産碧玉、水晶の玉作の開始とはほぼ併行する。

これらの特徴は原石や土器だけでなく玉作技術の総体が交流していると考えられ、それは「伊都国」の政治的意図が大きく反映したものと考えられる。今回の調査によって「伊都国」の繁栄を支えた経済基盤の一部を窺い知ることができると同時に「伊都国」の従来象に新たな側面を付け加えることになった。

（江崎）

註

- 1) 横口達也 1979『豊前県の歴史的研究』『九州総合自歩車道関係歴史文化財調査報告書X X I』福岡県教育委員会
- 2) 居部第3遺跡（高根県高野町）では弥生時代後期の玉作遺跡が発見され、弥生時代後期中葉の北部九州の複合口壺壺が出土している。同町の神田遺跡では古墳時代初頭の船材が出土し、周辺の遺跡では鉄器が豊富に存在することから、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての鉄素材と碧玉製品の日本海ルートとの交易を想定しており、注目される。

【参考文献】

1. 柳沢一男 1985『第17・20次調査の概要』『博多Ⅱ』福岡市教育委員会
2. 松尾宏編 2001『平塚川添遺跡』日本市教育委員会
3. 森井啓次編 2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県教育委員会
4. 寺村光晴 1968『古代玉作の研究』吉川弘文館
5. 寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館
6. 鹿島町立歴史民俗資料館 2003『海の記憶—波博を越えた人々— 鹿島町立歴史民俗資料館2003年特別展示図録』
7. 財団法人 石川県歴史文化財センター 2003『環日本海交流史研究集会記録—玉をめぐる交流—』『石川県歴史文化財情報』第10号

報告書抄録

ふりがな	うるうじとうきゅういせき							
書名	潤地頭給遺跡							
調査名	福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査概要							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第89集							
著者名	江野道和 江崎靖隆							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒819-1192 福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
保管場所	(写真) (図版) (遺物)	前原市教育委員会						
保管場所所在地	福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
潤地頭給遺跡	福岡県前原市 大字潤字地頭給	40222		33° 33' 51" ~33° 52'	130° 13' 13" ~03'	2003.1~ 2004.3	40000㎡ の内、 22,000㎡	小学校建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
潤地頭給遺跡	集落、 竊地、 生産遺跡	弥生時代 前期末~後期 前半、終末期 ~古墳時代前期 前半、古墳 時代中期、奈良 時代、中世	掘立柱建物、大溝、豊棺塚、 土坑墓、祭祀土坑、玉作工房、 排水溝、木蓋土坑墓、竇穴住 居、井戸、火葬釜		弥生土器、石剣、石砲石、石 斧、石鏃、投擲、豊棺、銅劍、 銅鏡、ヒスイ製勾玉、碧玉、 水部、メノウ、鉄石英、蛇紋 岩、井戸転用埴輪造形、銅鏡 具、須恵器、土師器、鉄器、 金類、磁器器、埴物遺体			

潤地頭給遺跡

—福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査概要—

前原市文化財調査報告書 第89集

2005年3月31日

発行 前原市教育委員会

福岡県前原市前原西一丁目8番14号

TEL 092-323-1111

印刷 株式会社 竜富印刷

福岡県前原市前原東三丁目1番8号

TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661



▲玉製作のイメージ



◀勾玉・管玉の装着イメージ



▲上空から望んだ湖地磯路遺跡

(中央下が裏地磯路遺跡、中央上に見えるのが可也山で、この奥には加布里湾が見える)